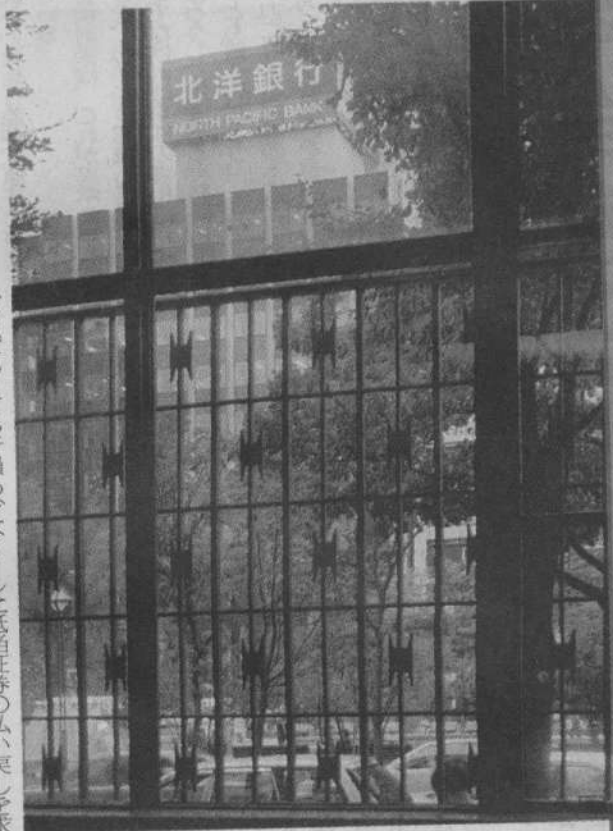


検証

# 崩拓銀

<12> 10.10.18



## 受け皿銀行

拓銀本店の窓から見える北の街。直属の上司の思いついた。おれも役員の大任を背負った。拓銀本店、破たんまでは拓銀銀行員にとって、近くて遠い存在だった。

道内各地で地元金融機関を集めた。「預金者には不安を与えないよう万全を期してほしい」。噂(うわさ)が噂を呼び現実になる。拓銀があらがえなかった悪循環の銀への手向けだった。

## 終えん

「これからお世話になります。だから心配しないでください。やおらソファから立ち上がり、力強い武井の言葉は北洋銀の武井正直頭取に向かって深々と頭を下げた。

# 上層部への批判噴出

ぼろせんとする行員も少なく、引き出された個人定期預金もなかった。

「道銀との合併をうまく生かす方法はなかったのか」役員とで、無念を晴らした。

昨年十一月十七日午前十時、北洋銀本店四階の役員応接室。一世に近い歴史に終止符を打った経営破たん。そして「苦悶されたんでしょね。」

「この河谷には世間の批判の目が待ち受ける。武井はねざらいの言葉をかけるよりほかなかった。

十九日までの三日間に流出した預金は個人、法人合わせ約四千九百億円。解約伝票が底をつき、「コビトで急場をしのいだ。

「敬称略、肩書は当時」(拓銀問題取材班)

「後のことは最大限努力し

「都銀初の経営破たん」の報道に、預金者は道内外の拓銀店舗の窓口に行った。「預金保護されるのか」「融資長から初めて聞かされた」と、

一九〇〇年(明治三十三年)、北海道開発のための国策銀行として出生した拓銀。

第一部「迷走の果て」は、十九日から第三回で終わり、十九日から第四部「病巣」を連載します。